アンダーランド　ジェイク

内容の比較

「ポピュリズムとは何か」

**『はじめに』**

* 具体例を多く挙げ、現実の例を用いて話の内容が掴みやすくなっている。また、２０１５年以降のポピュリズムの動きが例として挿入されているのが特徴的である（ブレグジット、トランプ当選、大阪都構想等）。
* 論の目的を、ポピュリズムという政治現象の全面的な分析としている（p.iii, ln. 10-11）。その上で、ポピュリズムの理論的位置付けに加えて具体的なポピュリズムの進展を論じてくという構成を明らかにしている（p.iii-ix）。また、その一環としてポピュリズムとデモクラシーの関係を考察し、「ポピュリズムとはデモクラシーに内在する矛盾を端的に示すものである」（p. ix, ln. 5-6）という命題を提起する旨を明かしている。

「ポピュリズムとデモクラシー」

**『はじめに』**

* 具体例を少なめに抑え、抽象的な説明の分量が多い。また、２０１５年以降のポピュリズムの展開を例に含まない（本論文が出されたのは２０１４年）。
* ポピュリズムの持つ二つの論理について説明し、それを用いてポピュリズムとデモクラシーが必ずしも敵対的ではないと示した上で、ポピュリズムとデモクラシーのアンビヴァレントな関係を考察することを論の主題としている。その中で、特に「デモクラシーの逆説」（p.128, ln. 1）としてのポピュリズムという問題を、その解決の糸口とともに明らかにすることを目的としている。特にポピュリズムを、デモクラシーとの関係という側面に絞って考察することを強調した導入となっている。

**『ポピュリズムとは何か』**

* 導入でポピュリズムの二つの論理について論じることでポピュリズムとデモクラシーのアンビヴァレントな関係を強調した上で定義に進む。
* 第二の定義を採用する理由として、政治運動としてのポピュリズムを説明するのにそちらの方が妥当であるとしている。

**『ポピュリズムの定義』**

* ポピュリズムの二つの定義にすぐさま入る。
* 定義の内容には具体性の違いがあるものの、大まかな内容としては一緒である。
* 第二の定義を選択する理由として、そちらの方が先鋭的にポピュリズムとデモクラシーの緊張関係を捉えているということを挙げている。

**「ポピュリズムとは何か」内で、ポピュリズムの特徴を述べている部分**

* 具体例で異なる部分はあるが、基本的に同じ内容。

**『ポピュリズムの特徴』**

* 具体例で異なる部分はあるが、基本的に同じ内容。

**『ポピュリズムは民主的？』**

**『近代デモクラシーの二つの原理』**

* 内容に大きな差異はない

**『「本質的に」民主的？』**

* 内容に大きな差異はない

**『ラディカル・デモクラシーとの共通点』**

* ポピュリズムとラディカルデモクラシーの共通点として批判の対象と一般の人々に対する「期待」の上、さらに「下」が「上」を批判する構図の共通性も挙げている。
* 専門的な表現が少なく、わかりやすい（p. 19, ln. 10-13）。

**『ポピュリズムとラディカル・デモクラシー』**

* ポピュリズムとラディカルデモクラシーの共通点として批判の対象と一般の人々に対する「期待」と、イデオロギー的な近づきを挙げている。
* 専門的で難解な用語が見受けられる（p. 138, ln. 17-18）

**『デモクラシーへの寄与と脅威』**

**『活性化か、脅威か』**

* ポピュリズムとデモクラシーの関係は両義的であると記述。

**『デモクラシーの発展への「寄与」』**

* ポピュリズムはデモクラシーとは親和性があっても、リベラル・デモクラシーとは緊張関係があると具体的に両義性を説明している。

**『四つの対処法』**

* 内容は概ね同じである。

**『ポピュリズムへの対応』**

* 内容は概ね同じである

**『ディナーパーティーの泥酔客』**

* 内容は概ね同じである

**『おわりに』**

* 内容は概ね同じである

まとめ：

　水島治郎の『ポピュリズムとデモクラシー』（2014年、千葉大学法学論集 第29巻第1・2号） と、それに対応する『ポピュリズムとは何か』（2016年、中公新書）の諸部分は、細かい点や具体的な例、構成を除いて内容がほとんど一致している。しかし、前者の方がいささか専門用語等の難解な語彙の使用が多く、後者の方が一般的な読者向けという印象を受ける。また、前者の方が目的が明確に絞られており、ポピュリズムとデモクラシーの関係に注目した論展開を行っており、後者ほどの話の広がりは持たない。見出しの付け方にも違いがあり、後者は細かい見出しを頻繁に挿入しているが、前者はもっと大きくまとめた見出しにより大まかとした論の流れが追いやすくなっている。

形式の違いによる効果：

文献Aの方が間接話法が多かった。文献Cの方が引用で厳密に参照元を記述しており、論を明確なエビデンスや根拠で固めていた。

1. ２０１６年と参考材料の違い
2. 目的意識の違い
3. 難解な単語の違い
4. 見出しにおける論展開の全体的な流れを資する。論理構造に合わせて見出しがついている。